

1章 なぜ、いま子どもたちの農業・農村体験なのか？

～地域と学校が連携して取り組む農業・農村体験のすすめ

1. 地域と学校が連携する農業・農村体験の意義について教えてください。

子どもたちに自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」を育成することをねらいとして、平成14年度から全国の小中学校で「完全学校週5日制」と「総合的な学習の時間」が本格的にスタートしました。学校において特に重視されることとなる体験的な学習や問題解決的な学習の充実には、各学校や個々の教師の努力のみならず、地域からの様々な学習素材の提供や学習環境、人的支援、パートナーシップ等が不可欠です。

これらのニーズに対し、農業・農村体験は多くの地域において、それぞれの地域の特色を活かした取り組みが可能であり、優れた学習素材を提供する活動です。体験的な学習の中でも、農業・農村体験が特に優れた点として、次の事項をあげることができます。

(1) 「いのち」を相手にする活動であること

動物はもとより、毎日少しずつ成長する農作物と向きあうことで、子どもたちは日常的に自分と「いのち」との関わりにふれることができます。動物の誕生に立ち会う、死を見送る、農作物が大きくなる、実として結実する、枯れる・・・子どもたちは自らとの関わりの中で、動物や農作物の成長を見守り、これらの出来事を心に深く刻みます。

(2) 地域のひと・暮らし・生業の中に分け入った体験ができる活動

地域が支える農業・農村体験により、子どもたちはこれまでに会ったことのない人や暮らし、生業、考え方の中に分け入った体験をすることができます。子どもたちは様々な現場で、そこにいる人々とふれあい「共感」を伴った「問題意識」や「学び」の機会を得ることができます。

(3) 私たちの「暮らし」に直結する活動として

毎日、私たちは食事をとります。しかし、分業化、都市化が進む今日では、食べものの生産現場に思いをはせる機会が少なくなっています。こうした「食と農の距離」を見直すことは、今後の生活や社会を考える上で大きな課題となっています。農業・農村体験は、子どもたちと大人と一緒に考える、身近でありかつ社会とのつながりを考える優れたテーマです。

さらに、土に直に触れ身体を動かす、子どもどうし、大人と子どもが普段とは異なる価値観のもと一緒に作業するといった、子どもたちの成長の上で重要な体験の機会を多数含んでいます。

2. 地域と学校が連携する農業・農村体験で、子どもたちに期待される効果は何ですか？

農業・農村体験は、「感じる」「発見する」「知る」「考える」「食べる」「つくる」「交わる」・・・といった子どもたちの様々な能力が発揮される機会となります。

子どもたちの発達、具体的な体験を中心に情緒的な面から、抽象的な思考を含んだ論理的な面へと展開しますが、今日の子どもたちは具体的な体験を介さずに、抽象的な段階への学習に進みがちであることが問題視されています。地域をフィールドとし、人、生業、暮らし等の中に入り込んで行われる農業・農村体験は、子どもたちが具体的な体験や様々な人々とのふれあいを通じた知識の習得や論理的思考への発展が可能となる取り組みの一つです。

現地レポートで紹介した我孫子第二小学校の卒業生や飯田市の農家に滞在した武蔵野市立第四中学校の在校生に農業・農村体験について尋ねたところ、体験の効果として主に次のものが見受けられました。

(1) 子どもたちの「こころ」に強く残る出来事として

農業・農村体験をした子どもたちに話を聞くと、自らの体験について話題が次々と出てきます。子どもたちが話す体験の一つ一つから、活動への自らの関わりの深さ、すごしていた時間の中身の濃さが感じられます。特に世話をしていた動物の「死」や「別れ」といった「いのち」との関わりや滞在先の農家や家族との「出会い」について、深くこころに残っている様子が伺えました。「子ども時代の楽しい思い出を振り返ってみるとそこには農業体験があった」という声が数多くあります。

(2) 多様なコミュニケーションが育まれる機会に

体験後、子どもたちは友達や家族に自らの体験を積極的に話しています。滞在先の子どもの家族が農家に手紙を書いたり、家族が農村を訪ねる例もあり、農業・農村体験を介して、子どもたちどうし（同級生どうし・上級生と下級生など）はもちろん、地域の人、家族や先生との豊かなコミュニケーションが育まれています。

(3) 自分の地域や農業・農村への理解が促される

我孫子市立第二小学校の卒業生からは、低学年の時、高学年での米作りを心待ちにしていたこと、自らの学校の取り組み（農業体験等）を誇りに思っていることが聞かれました。武蔵野市立第四中学校の在校生からは農家での体験をまたやりたいとの声が多く聞かれました。

このように体験を通し子どもたちは農業・農村に、大変ポジティブな意向を持っており、活動を企画した先生や支援した農家にとってはうれしい手ごたえとなっています。

他にも、農業・農村体験で子どもたちが農作物を栽培した後、野菜への好き嫌いが少なくなった、給食を残さなくなった等、様々な面での効果が聞かれました。

他にも農業・農村体験による様々な効果が見られるものの、基本的に体験は子どもたちの中でゆっくり熟成するものようです。

3. 地域と学校が連携する農業・農村体験が地域に及ぼす効果は何ですか？

農業・農村体験において地域が学校を支援することは、自分たちの子どもを健全に育てたい、地域の子どもの通う学校を応援したいという、親として、地域住民としての自発的な活動に負うところが主であり、まず子どもたちの効果を考えた活動となっています。その一方では地域の農業・農村の活力につながる、次のような効果が期待されます。

(1) 子どもたちおよび大人の農業・農村における理解を促す

地域と学校による農業・農村体験は、子どもたちが農業・農村を理解するだけでなく、子どもたちの体験を介して親や家族、先生など、大人たちが農業・農村への理解を深めるまたとない機会となります。現在、地域住民の農業や農村に対する関心が高まっていますが、自分の子どもに農業体験をさせたいかと尋ねるとそのニーズは一層高くなるのが通常です。子どもたちの農業・農村体験は、子どもたちへの理解を促し、関心を高めるだけでなく、活動に携わるPTAや先生をはじめとする地域住民の農業・農村への関心を高める上で大きな効果が見られます。

(2) 地域の信頼関係にもとづく新しい農業・農村振興

消費者における農産物の生産地表示、信頼おける組織が生産した農産物へのニーズに対し、直売や産直など顔の見える、信頼関係にもとづいた新しい流通の構築が今日の農業・農村振興において課題となっています。子どもたちの農業・農村体験を機に生産者と消費者の関係づくりが進み、学校が給食に地場産の農産物を使ったり、産直の取り組みに発展するなど、信頼関係にもとづいた新たな農産物の販路が形成されるケースが少なくありません。また、飯田市のような主産地形成が難しい中山間地域等では、少量多品目の農産物や加工品づくりなどにより、農家の多角化した経営が行われており、その一環として、農家が子どもたちの民泊受け入れを行う、グリーン・ツーリズム事業がスタートしています。

(3) 高齢者や女性等の技や知恵を活す場、生きがいづくり

子どもたちに食や農に関する様々な体験の場を提供する農業・農村体験は、近代的な農業ばかりでなく、農村の暮らしや伝統的に行われてきた暮らしやものづくりの知恵や技術が中心になっています。こうした体験を提供する際に活躍するのが地域に伝わる技術や知恵を知っている高齢者や料理や保存食づくりを行っている女性等の技です。

また、子どもたちが農家で体験する際に、おじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちにいろいろな話しをしたり、子どもたちと一緒に時間を過ごすなど、高齢者や女性等の新たな出番が生まれ、やりがいや生きがいにつながっています。